

《論文》

中国と日本のラッカセイ伝播史における
「落花生」の同定

前 田 和 美*

は じ め に

別稿で、新大陸からラッカセイ (*Arachis hypogaea* L.)**が伝播したころの歴史における中国と日本の関係や、その当時の植物学的性状、栽培法の記述などについて報告した〔前田 2001a,b〕。16～17世紀になって伝わった新大陸原産の作物が普及するまでには、中国の本草学者たちのそれらの記述には混乱があったが、その影響はわが国の江戸時代の本草学者たちにも及んでいる。今日、中国でラッカセイは「落花生」または「花生」と呼ばれる。和名の「ラッカセイ」もこの「落花生」の音読みに由来するとされているが、ラッカセイが中国へ伝播する以前から、すでに「落花生」あるいは「花生」と呼ばれていた作物があった。近年、これらの記述を根拠にラッカセイを中国大陆原産とする説がある。本稿では、この「落花生」と呼ばれた作物の同定を通じて、ラッカセイの中国と日本への伝播初期の歴史について考察した。

1. 「コロンブス以前」の記述について

1958年と1961年に中国の浙江省と江西省の新石器時代晩期の竜山文化に属する原始社会遺跡から、炭化した「花生仁」、すなわち、ラッカセイの種子が出

*まえだ かずみ、元高知大学

**作物名は片かなで表した。引用した原文の中国名、漢字名はそのまま、種名不詳の場合は「ラッカセイ」のように表した。

土したと報じられて以来、ラッカセイの中國大陸原産説が復活している〔前田2001a〕¹⁾。新大陸発見以前から中國大陸でラッカセイが栽培されていたとする主張に対しては中国でも批判があるが、まずこれらの記述について考察する。

1) 『南方草木状』の「千歳子」について

西晉時代の304年に刊行された、熱帯から亜熱帯産の植物全80種を記載する、嵇含著『南方草木状』巻下、果類（17種）²⁾の「千歳子」がラッカセイであるとする説がある〔陳1991、張（光直）1976、巖1989、孫ら1979〕。その全文は次のようである。

“千歳子、有藤蔓出土、子在根下、鬚綠色交加如織、其子一包恒二百余顆、皮殼青黃色、殼中有肉如栗、味亦如之、干者殼肉相離、撼之有声、似肉豆蔻、出交趾。”

孫らは、この地上部が藤蔓、すなわち、つる性の植物が、莢殻があり、中身の肉質と味は栗のようで、乾くと莢殻と種子が離れて撼（ゆす）ると音がするなど、その性状からラッカセイであるとし、「鬚綠色交加如織」の「鬚」もラッカセイの子房柄であるとして、南米大陸以外では知られていないラッカセイ属（*Arachis*）野生種の中國大陸における存在の可能性すら示唆している〔1979〕。

『本草綱目』〔1578〕にはこの「千歳子」も「落花生」も現れていないが、ラッカセイ伝播後の18世紀後半に編纂された『本草綱目拾遺』第八巻「果部」、 「千歳子」の項に上記の記述が引用されている。しかし、後述するが、『綱目拾遺』第七巻「果部」の「落花生」の項には引用されていないので、「落花生」と「千歳子」とは別種として扱われていると考えられる。孫ら〔1979〕はこの

1) 甲元は、中国の新石器時代の遺跡で発見されるマメ類として、ダイズ、アズキ、ソラマメのほかにラッカセイも挙げている。しかし、ラッカセイが新大陸原産であることからの考察はされていない〔2001〕。

2) 『南方草木状』は、上、中、下3巻からなり、中国の亜熱帯から熱帯地方の植物約80種を記載する。晉代の嵇含〔263-306〕の著とされる。この著者や刊行の年代などに問題があるとされるが、世界でも最も古い地方植物誌として価値が高い〔華南農業大学農業歴史遺産研究室1990、胡1963〕。

『綱目拾遺』の記述には触れていない。

「其子一苞恒二百余顆」の“一苞”は一株のことであるが、孫らは、「ラッカセイの開花と結実は無限であるので莢実の潜在的生産力が大きい。良好な栽培条件下では、1株あたりの莢実数が約700個、種子数では約1300個という試験成績もある」として、「当時、この植物は“奇花異木”として、ごく大切に疎植で栽培された。それで、1株に100個以上の莢実が形成されたと考えると200個以上の種子の生産もあり得る」とも述べている〔1979〕。無競争条件での結実を調べた筆者の観察〔前田 1970〕からも、この孫ら〔1979〕の解釈は生育条件によっては必ずしも間違っていない。しかし、後で述べるが、この「千歳子」をラッカセイとする見解には、記述の年代からだけでなく大きな疑問がある。

北村は「千歳子」は同定がされていないと述べているが〔1985〕、「千歳子」に関する記述は、南宋時代（1126～1367）の『桂海虞衡志』、周去非『嶺外代答』、清代初期の李調元『南越筆記』（後述）、同中期の『大埔県志』（1744）〔大埔県は現・広東省〕などの地方志にもあるとされる〔李（長年）1990、孫ら1979〕。

中国では1983年に、『南方草木状』の植物学史的価値について、その著者や刊行の年代、記述の考証、記載種の同定など、各分野の論議が行われており、その論文集が刊行されている〔華南農業大学 1990〕。それには「千歳子」について、次のような見解がある。

李（長年）は、六朝時代（3～6世紀）あるいは7～10世紀に書かれたとされる長安の古跡誌『三輔黄图』（米山ら1992『大漢語林』による）に、前漢の武帝が元鼎6（B.C.111）年に南越を破って入手した“奇草（花）異木”を扶荔宮に集めて植えたという記録があり、その中に「千歳子」があると述べている。そして、もし、これをラッカセイとすれば、ラッカセイが漢代にまでさかのぼることになるとし、「千歳子」を“ラッカセイ”と考えるようになった誤りは『大埔県志』の「落花生一名千歳子」という記述に始まるようだとし、他の記述からも「千歳子」はラッカセイではなく、木本の果樹の1種であると結論

した。そして、その植物の同定にはなお研究が必要であるとした上で、「仙人掌」(サボテン) (“仙人掌上に生ずる子・・・また千歳子と名づける”。国譯『本草綱目拾遺』)の他に、「青脆子」(不詳)や「梗聚子」(ナンソウシ。マメガキ。北村1985)、さらに、イチジク属の1種、「地瓜」(*Ficus fikoua* Bur.)とする説を述べている〔1990〕。ほかに「野葡萄」の類(*Vitis* spp.)とする説もある〔呉1990、戚1990〕。

『南方草木状』の刊行の年代だけでなく、「千歳子」は「子在根下」という植物であるが、後代の文献では多く見られる“花落土中即生”など、ラッカセイの顕著な地下結実性の記述がないことや、「鬚」も「子房柄」とは考えにくく、「千歳子」をラッカセイとすることには疑問があると考えられる。このことについて、李(恵林)は、「千歳子」は「子在根下」だが「子在地下」ではない、また「鬚」は気根であるとして、緑色の気根の下部で開花して「一苞数十百顆」を結実する植物としては、「野葡萄」の「千歳纂」〔センザイルイ。サンカクズル? (*Vitis flexuosa* Thunb.) 北村1985〕か、その近縁種が考えられると述べており〔1990〕、注目される。

また、記述の「千歳子」の形態的特性と、「出交趾」(交趾は現在のベトナム北部)、もしくは「南越」の原産という記述から、もっとも近いのは、「雲南蘇鉄、*Cycas siamensis* Miq.」だとする説もある〔楊1990〕。

ラッカセイの中国大陸原産説が、以上のような『南方草木状』の「千歳子」の記述を根拠にすることには疑問が多い。

2) 「香芋」について

北村は、唐代(618-907)の段成式著『酉陽雜俎』(850ごろ)では「落花生」の話は見つからないと述べているが〔1985〕、『本草綱目拾遺』の「落花生」の項に『酉陽雜俎』の次のような引用がある。

“又有一種、形如香芋、蔓性、藝者架小棚使蔓之、花開亦落土、結子如香芋、亦名花生”

孫らは、この記述は唐代に「花生」、すなわち、ラッカセイが栽培されていた

たことを示すものだとしているが、「形如香芋」や「結子如香芋」から「香芋」と「花生」は別種であろう。また、『酉陽雜俎』について、翻刻や増補がたびたび行われていて、『汲古閣本』³⁾など、後代の多くの版本には上記の記述はなかったとも述べている〔1979〕。「香芋」は、『本草綱目拾遺』の「諸蔬部」に「土芋即黄獨、俗名香芋、肉白皮質、形如小芋、一名土卵」として出ている（後述）が、この「香芋」については後で改めて触れたい。

3) 「長生果」について

ラッカセイには、「落花生」のほかにも、「花生、香芋、万寿果、落生、番豆、降鰲、地豆、落花参、無花果、香遜、土露子、落地松、滴水生」など、実に多くの中国名があるが、「長生果」もその一つである。孫らは、元代（1260～1367）から明代初期（1300年代後半）ごろのひととされる賈銘著『飲食須知』の次の記述の「落花生」がラッカセイのことであるとしている〔1979〕。これに「香芋」と「長生果」の名が出ている。

“落花生、味甘、微苦、性平。形如香芋。小兒多食、滯氣難消。近出一種落花生、詭名長生果、味辛苦甘、性冷、形似豆莢、子如蓮肉、同生黃瓜及鴨蛋食、往往殺人、多食令精寒陽萎”

この記述では、形が「香芋」に似ていて、子どもの多食はよくないとされる「落花生」は、「長生果」という詭名（奇異な名称）で近ごろ知られるようになった「落花生」とは味が異なる。後者はまた、形が豆莢に似る、生のキュウリやアヒルの卵との食べ合わせでは死ぬこともある食べ物であるなど、「落花生」は「豆」類ではなく、「長生果」はその異名であるが「香芋」とは別種の作物であると考えられる。なお、「蓮肉」（蓮子）はハスの実である〔『成形図説』、『本朝食鑑』〕。諸橋も、「香芋カウウ」と「長生果チャウセイクワ」を、それぞれ、「なんきんまめの異名」、「らくくわせい、落花生の異名・・・『本草拾遺』」としている。〔1985〕

3) 明の毛晉の蔵書室の名称。「閣」には“役所、建物”などの他に“棚”の意味がある〔米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、東京、1992、その他による〕。

篠田は、368種の食物を扱っている『飲食須知』の記述の信頼性には疑問があるが、「当時の食物について面白いのは玉蜀黍と落花生だ・・・、落花生も当時あったはずだが正確な記録はない」（傍点は筆者）と述べている〔1974〕。刊行の年代からもラッカセイの記述か否か疑問があるが、「落花生」という作物名が「コロンブス以前」にすでにあったことが注目される。後でも触れるが、「長生果」は、『綱目拾遺』に、『福清県志』（福清県は現・福建省福州市）や『本経逢原』からの引用があり、「落花生」の異名であると考えられる。

4) 『食物本草』ほかの記述について

元代の李杲著『食物本草』に「ホド・・・一名香芋」の記述があるとされているが〔『本草綱目啓蒙』（1804）〕、本書は江戸時代のわが国の本草書に引用が多い。その「卷三果類」の58種類のなかには「落花生」の名前が出ていとされている〔中村ら 1987〕⁴⁾。しかし、『綱目』にも、孫ら〔1979〕にも引用されていない。

また、牧野文庫蔵の同書「異果類」22種の記述に「草木志云」として前記の『南方草木状』とほぼ同文の「千歳子」の記述の中に、「桂海志云、状似青黄李。味甘・・・」と述べられているが、この記述でも「千歳子」はラッカセイではない。なお、「桂海志」は、南宋時代（1127～1279）の『桂海虞衡志』のことと思われる。

周定王・撰（朱橚⁵⁾）『救荒本草』〔1406〕と、著者の生没年（1397～1476）から15世紀半ば（明代）のものとされる蘭茂著『瀛南本草』にも「花生」の記述があるとされる〔孫ら 1979〕。

以上の検討から、「コロンブス以前」の中国文献にある「千歳子」をラッカ

4) 李杲の著作目録に『食物本草』がなく、著者についても疑問があるとされる。和刻版（1651、京都）を底本に用いている中村ら〔1987〕の国訳には「果類」の「落花生」は省かれている。筆者は、牧野文庫蔵本で「千歳子」の記述は確認できたが、「落花生」は未確認である。

5) 『救荒本草』の撰者は、周定王〔本名「朱橚」〕とする説と、誤って、その子の周憲王とする2説がある〔天野 1975〕。

セイとする説は否定してよいと考えられる。しかし、すでに「落花生」と「花生」、そして「香芋」という名前の作物があり、「落花生」は「香芋」に似ており、「長生果」の異名でも呼ばれたつる性の作物であったことが明らかになった。当時でも、栽培には棚が必要なつる性の植物と、地面に枝が這うラッカセイとの区別は容易であったであろう。その年代からも、新大陸発見以前の文献の「落花生」、「花生」、「香芋」、「長生果」は、いずれもラッカセイではないといえる。

2. 「コロンブス以後」の記述について

孫らは、ラッカセイについての明確な記述がないことから李時珍『本草綱目』〔1596〕や徐光啓『農政全書』〔1639〕以前の中国にはラッカセイがなかったとは断定できないとすることの理由として、当時はまだ、ラッカセイの油料や薬用作物としての価値がよく知られなかったためだと述べている。そして、「落花生」の記述がある「コロンブス以後」の文献として挙げているのは、『上海県志』〔1504〕、『姑蘇県志』〔1506〕〔姑蘇県は現・江蘇省蘇州市〕、黄省曾『種芋法』〔1530〕、王世懋『学圃雜疏』〔1587〕、李詡『戒庵漫筆』〔1593〕、馮應京・編『月令廣義』〔1604〕、周文華『汝南圃史』〔1620〕〔汝南は現・河南省汝南県〕、『葦芳圃』などである〔1979〕。この『葦芳圃』は、王象晉著とあるので『葦芳譜』〔1621〕であろう。これらと、16世紀以後の文献のいくつかの記述について検討する。

1) 『本草約言』

明代（1368～1661）の薛己編輯の本書卷之三『食物本草約言』では、「落花生」は、穀類とマメ類を扱う「穀部」35種には含まれず、「果部」57種の中に「甘蔗」や「椰子肉」と並んで、次のように記述されている（牧野文庫蔵、京都和刻本による）。

“落花生、藤蔓莖葉似扁豆、開花落地。一花就地、結一果、大如桃。深秋取

食之、味甘美異常、人所珍重。”

扁豆（欄豆）はフジマメで〔前田 2000および注6〕、この記述からは「落花生」がマメ科の植物であることが示唆されるが、食用にする地下形成物の大きさからラッカセイではない。貝原益軒は、『大倭本草』（1705）の穀類27種の中の「落花生」の記述で、「典籍便覧云」として上記の記述を引用している。しかし、「今案ずるに『本草約言』や『食物本草』などの文献に出ているが『本草綱目』には記載のない豆の類である。長崎に多く栽培される」と、注記ではラッカセイについて述べながら、引用する「大如桃」という記述に疑問を呈していない。これは、益軒が実物をまだよく知らずに「落花生」の記述をラッカセイのことであると考えたためであろう。中国で、「落花生」がラッカセイとして記述されるようになった『本草綱目拾遺』の刊行は『大倭本草』よりも約70年も遅い。

2) 『常熟県志』〔1503、1538〕

本書の「土産商品」の末段、「花生」の条に次の記述がある〔山東省花生研 1982〕。

“香芋、宜高地、浮土植之、生有小毒、煮熟可食、味甚香美。”

“落花生、三月栽、引蔓不甚長。俗云、花落在地、而子生土中、故名。霜後煮熟食之、其味纔美。”

常熟県（現・江蘇省常熟市）はラッカセイの産地であったとされており〔Ho1955〕、李（長年）〔1990〕は「花落在地、而子生土中」はラッカセイの特性であるとしている。新大陸発見直後の刊行である本書にも「落花生」の名前が出ていることが注目されるが、この記述では「香芋」と「落花生」とは別種であろう。

6) 「扁豆」はヒラマメ (*Lens culinaris* Medik.) にも用いられる。

3) 黄省曾『種芋法』〔『芋經』1530〕

“引蔓開花、花落即生、名之曰落花生。”

“皮黃肉白、甘美可食、莖葉如扁豆而細、謂之香芋。”“皆嘉定有之。”

これとほとんど同じ記述が『本草綱目』「菜部」、「土芋」の項に見られる（後述）。孫らは、つる性の作物である「落花生」は「花落即生」の記述からラッカセイであり、「皮黃肉白・・・」以下の記述は、「扁豆」のような莖葉をもった別の作物「香芋」のことであるとしている〔1979〕。両種の産地、「嘉定（県）」は現・上海市である。

「甘藷」や「馬鈴薯」については述べていない〔天野 1975〕この『種芋法』は、“taro”（タロイモ）の栽培法を述べたものとするHoは、「中国名の「落花生、*lo-hua-sheng*」は“花が地に落ちて種子ができる”という意味で、間違いなく“peanut”のことである。落花生と香芋（*hsiang-yü*, fragrant taro）とは別の植物である。数百年間の地方志で他の植物に落花生の名称が与えられている例はない」と述べている〔1955〕。ただ“マメ科の莖葉をもった”「香芋」をサトイモ科のイモ類を指す“taro”としていることや、「扁豆」を“broad bean”（ソラマメ）としているなど、作物名の同定には問題がある。

『種芋法』が記述された年代からみて、当時、ラッカセイがすでによく知られていたとは考えにくく、「落花生」はラッカセイとは別の作物であったと考えられる。

4) 王世懋・撰『学圃雜疏』〔1587〕

本書の巻二は、「果・蔬（付水草）・瓜・豆・竹」などの「五蔬」について述べているが〔天野 1975、王（毓）1964〕、その中にも「香芋」と「落花生」が嘉定県で広く栽培されていたと述べられている〔Ho 1955〕。しかし、この年代には、すでにラッカセイが沿海地方で知られていた可能性はあるが、ひろく普及し、栽培されるようになるのは17～18世紀になってからである〔前田 2001a〕。

5) 周之璵『農圃六書』〔明代〕

明代の刊行とされる本書の「卷之一樹藝」の記述では、根菜類は「落花生」から始まって、白ダイコン、ショウガ、ニラおよびネギなどが並んでいる。そして、「豆（ダイズ）」、エンドウ、ソラマメ、フジマメ、ササゲ、ナタマメ、「赤豆（アズキ）」などのマメ類（全8種）を記載する「瓜豆部」に「落花生」は含まれていない。『農圃六書』の明確な年代は不詳であるが、『綱目』にも『綱目拾遺』の「落花生」の項にも引用がなく、孫ら〔1979〕も触れていない。その「落花生」の記述は次のようである。

“藤蔓莖葉似扁豆。開花落地、一花就地、結一果。其形與香蘋相類、亦二月內種。喜鬆土。用隔年肥沃壟、宜栽背陰處。秋盡冬初取之。若未經霜則味苦、與香蘋山菜但出嘉定瀕海之地。”

「香蘋」は「香芋」であろう。同じ記述が次の『致富全書』にもある。「落花生」が根菜類として分類されていることから、この記述は地下で“結果する”マメ科のつる性のイモ類であることを強く示唆する。

6) 周文華『致富全書』（別名『汝南圃史』）、〔明代、1620/1621〕

寺島良安著『和漢三才図会』（1713）、卷第九十六「蔓草類」の最後にある「落花生、番豆、土露子、滴水生、長生果」の項に、この『致富全書』からとして前記の『農圃六書』と同じ記述がある。ただし、後でも触れるが、『和漢三才図会』の「落花生」の図の植物はラッカセイではない。また、その訳注〔島田ら 1991〕と同じ「香蘋こうよ」と「香薯蘋さつまいも」の訓訳は、国譯『本草綱目拾遺』にもあるが、中国では、一般に「薯蘋」はヤマノイモ、またはジネンジョである。

7) 『衢州府志』〔清代、1711〕

“落花生、種自閩中、堆沙植之、花落沙土、結実如蜜。”

〔「衢州」は現・浙江省衢州市、「閩」は福建（省）である〕

8) 『本草綱目拾遺』

『本草綱目』〔1578〕の「穀部」、「菽豆類」14種の中に「落花生」は出ていないが、その約190年後（1765）に趙学敏によって編纂された本書の第七巻「果部」に次のような「落花生」の項がある。

①陳扶搖『花鏡』〔清代〕

“落花生一名香芋、引藤蔓而生、葉極、開小白花、花落於地、根即生実、連絲牽引、土中累累不断。冬尽掘取。煮食香甜可口。南浙多産之”

〔「浙」は浙江省である〕

この『花鏡』のみが「落花生」は「一名香芋」と述べてイモ類であることを示唆している。国譯『本草綱目』は「それが土中に牽き連なり」と読んで“絲”は訳していないが、「連絲牽引土中」は“細い根”にイモが連なる様子と解され、後でも述べるが、この“絲”をラッカセイの「子房柄」〔写真1a, b〕のことと解するのは難しいように思われる。



写真1-a 地上で伸長させたラッカセイの子房柄と肥大が停止した先端部（胚）。紫緑色を帯びる。



写真1-b ラッカセイの地中結実の様子。

②王風九『彙書』〔17世紀、清代初期〕

“近時有一種名落花生者、莖葉俱類豆、其花亦似豆而色黃、枝上不結実、其花落地即結実於泥土中、奇物也。実亦似豆而稍堅硬、炒熟食之、似松子之味、此種皆自閩中来。”

③方以智『物理小識』〔1643〕

“番豆名落花生・土露子、二三月種之。一畦不過數子、行枝如蘿菜虎耳藤橫枝、取土压之。藤上開花、絲落土成実、冬後掘土取之。殼有紋豆、黃白色、炒熟甘香似松子味。又云、番豆。花透空入土結豆、・・・”

『事物異名録』、「蔬穀、番豆」に「物理總論 番豆名落花生・土露子・・・」と、ほぼこれと同じ記述がある〔諸橋 1988〕。

「蘿」は蘿菜（ヨウサイ。ヒルガオ科。*Ipomoea aquatica*）で、熱帯～亜熱帯の湿地に育つ野菜であるが、小野蘭山著『本草綱目啓蒙』は「苗形甘藷に似て根に塊なし」と述べている。また、「虎耳藤」は「虎耳草、ユキノシタ（ユキノシタ科）」〔北村 1985〕の“つる”だとすれば、ほふく枝を伸ばして地表を覆う両種の性状に「落花生」が似ているとされたのであろうか。なお、「松子」は松の実である。

④李調元『南越筆記』〔1643〕

“落花生、草本蔓生、種者以沙压横枝、則蔓上開花、花吐成絲、而不成莢。其莢乃別生根莖間、掘沙取之、殼長寸許、皺紋中有実三、四、状蚕豆、味甘以清、微有参氣、亦名落花参。”

⑤張璐『本經逢原』〔1695〕

“長生果 一名落花生、甘温無毒。

發明 長生果産閩地、花落土中即生。従古無此、近始有之。味甘氣香。”

⑥『嶺南隨筆』

“花与葉不相見為換錦花、莢与蒂不相見、為落花生。種法、以沙压横枝則蔓生花不生莢。其莢別在根莖間。亦称落花生。”

「換錦花」については明らかでない。

⑦屈大均『廣東新語』〔1700〕

前記の『南越筆記』の記述に加えて下記の記述がある。

“・・・凡艸木之实、皆成于花、此独花自花而莢自莢、花不生莢、莢不蒂花、亦異甚。（中略）爰有奇実、自沙中来。以花為媒、不以花胎。花生于蔓、子結于莢（根）。香如松子、一莢数枚。（中略）粵多藤族、故凡艸之蔓皆

以為藤、藤菜者言其蔓柔如藤、非藤之菜也、落花生其蔓亦曰‘藤’、花生藤上、一花落土生一子、故‘落花生’……”〔「粵」は現・広東省である〕

ラッカセイの開花と結実の特異性や茎の性状が述べられている。「一莢数枚」を“一莢に数粒”の意と解すると、品種はバレンシア・タイプである。

⑧『福清県志』〔1747〕

“落花生、一名長生果。出外国、昔年無之。蔓性園中、花謝時、其中心有絲垂入地結実、故名。一房可二三粒、炒食味甚香美。康熙初年、僧應元往扶桑覓種寄回、亦可压油。今閩省産者、出興化為第一、名黃土、味甜而粒滿。出臺灣、名白土、味淡而粒細、其油煎之不熟、食之令入瀉、一名土豆。”

「落花生、一名長生果」とあり、ラッカセイの異名である「土豆」の名が出ている。『本草綱目拾遺』が引用する以上の8文献の「落花生」の記述は、やや疑問がある『常熟県志』、『花鏡』、『種芋法』、『本經逢原』などを除くと、茎葉、黄色の花、「花吐成絲」、「藤上開花、絲落土成実」、花が「謝る（萎れる）」と“絲”（子房柄）が垂れて地中に入って結実すること、さらに莢実の性状など、ラッカセイの記述であるといえる。福建省など亜熱帯気候の地方では、旧暦2、3月の播種や、冬遅く掘ることも妥当であろう。篠田は「僧應元が扶桑（日本）で種を覓（もと）めて持ち帰った」というのは疑問だとしているが〔1974〕、油を搾ることや福建に産するなどもラッカセイの記述である〔前田2001b〕。

16～18世紀ごろには、子房柄の地下侵入を助けて結実率を高めるために、竹製の筵や箕で「茎蔓」を压える「压蔓」や、子房柄が伸びている分枝に培土する「压土」〔「取行間潤湿土壤撒于植株上、埋没側茎已生果針的部分……」唐1986〕が行われていた。「横枝取土压之」や「種法以沙压横枝」はこの「土寄せ」のことと解される。なお、「果針」は、最近の術語で子房柄のことである。

⑨『滇海虞衡志』〔1799・1804〕

「滇」、すなわち雲南の博物志である本書には、次のような記述がある。

(1) 牧野文庫蔵本〔清、嘉慶9年（1804）〕、(2) 山東省花生研（1982）

“落花生、為南果中第一、以其資于民用者最高廣。・・・今已遍于海濱諸省、江西頗種之、而吾鄉從來未有種者、由于不知其利也、滇粵相連、滇境邇之、近來頗有。”

(3)『雲南省社会科学院刊本』〔1990〕

“落花生、為南果中第一、以其資于民用者最高廣。宋元間、与棉花、蕃瓜、紅薯之類粵估從海上諸国得其種歸種之、・・・落花生曰地豆、・・・”（中略）“以榨油為上、故自閩及粵、无不食落花生油、且膏之為灯、供夜作。今已遍于海濱諸省、利至大。・・・”

以上のようにラッカセイがワタ、カボチャ、カンショなどとともに宋から元の時代に、広東（粵）地方へ海上の経路で種子が伝わった作物であると述べられ、ラッカセイの異名である「地豆」の名も出ている。油は食用には用いずに灯火用に用いたこと、また、当時、南方産の作物として沿海地方に広まっていたが、その利用を知らなかったので雲南地方では栽培がなかった。しかし、近ごろでは広東から入って増えていることなども述べられている。

以上のように、「コロンブス以後」になると、ラッカセイ伝播後の初期のころには、まだ、ラッカセイと、「落花生」や「長生果」、さらに「香芋」とが明確に区別されていないような記述も見られる。しかし、ラッカセイは最初に入った福建〔前田 2001a〕からすでに雲南にまで普及しており、「落花生」がラッカセイとして記述されている。そして、「香芋」は別種の作物として区別されていることが認められる。

3. 「落花生」と「香芋」の同定

ラッカセイが中国へ伝播した初期には、その地下結実の性状から「奇物なり」とされ、一般の草木に比べて、開花と地中での結実の関係について、とくに子房柄のことや、花が萎れてから地中の“根下”や“根茎之間”に“子”や“実”を結ぶことなどの性状が注目されていた〔前田 2001b〕。しかし、今までに述

べたように、古くからあった「落花生」という作物と、新しく新大陸から伝わった作物のラッカセイとが混同され、記述されてきたことが推察された。その原因が、ともにマメ科で、つる性または、ほふく性の植物であり、その地下形成物を食用にしたということにあったと考えると、「落花生」という作物の同定には、ラッカセイの伝播期前後の文献に現れる、その名前の由来でもある、“花開亦落土、結子如香芋”、“花落土中即生”、“花落在地、而生子土中”、“開花落地、一花就地、結一果”、“花落即生”などの記述を植物学的、作物学的に説明する必要がある。

マメ科のイモ利用作物のクズイモ (*Pachyrizus erosus* Urban) やシカクマメ (*Psophocarpus tetragonolobus* L. DC) では、栄養成長や莢実の発育とイモの肥大とは同化産物の受容において競争関係にあり、イモの肥大が盛んであると落花して結実しにくい。したがって、栽培では、イモの肥大を促進するために剪枝や摘莢が行われ、また、種子用の品種とイモ用の品種が分化している〔前田 1991〕。古い時代に中国では、このような生理的な原因で、“開花はするが、花は萎れると落ちて莢や種子ができない。しかし、土を掘ると「子」(イモ) ができている”という、マメ科の1種の作物が「落花生」と呼ばれていたと推察される。

先にも触れたが、『和漢三才図会』の「落花生」の図の植物は、葉が3~5小葉の複葉で、莖は先端が巻きひげ、そして、地上で結莢している。繭形の莢実らしきものと不明のイモ状のものも描かれている。“扁豆、フジマメ”を連想させるこの図の植物はラッカセイではない。しかし、『種芋法』、『食物本草』、『農圃六書』、『彙書』のような中国本草書などの「落花生」の性状の記述にはよく符合しており、「落花生」がイモ類であることを示唆する。また、曾榮著『成形図説』〔1804〕では、「黃獨ケイモ」は「カシュウイモ」とされ、図の植物もヤマノイモ科で正しいが、「香蕓ハッシュイモ」とある図の植物は葉や花序の形態がナス科でジャガイモに似ている。また、小野蘭山著『本草綱目啓蒙』〔1803〕「菜之二」「土芋」の項には、「ケイモ、カシュウイモ・・・コレハ薯蕓ノ類ニシテ蔓生ナリ。(中略) 俗名ホド・・・一名香芋食物本草土圖児救荒

本草、地栗子、山中ニ生ズ。・・・葉互生ス形小豆葉ニ似テ五葉。夏月葉間ニ花ヲ生ズ。・・・形豆花如ニシテ・・・其根モ蔓ニシテ数塊ヲ連ヌ。形鶏卵ノ如ク黄赤色・・・」と述べられている。ただし、この記述は、地上部の性状が異なるヤマノイモ科とマメ科の植物を混同している。

また、「土豆」について、木村（康）は校注で、『本草綱目』第二十七卷「菜部」の「土芋ー土卵、黄獨、土豆」をマメ科のクズイモとしている〔1973〕。これに対して、木村（陽）は、『本草綱目拾遺』第八卷「諸蔬部」にある「土芋藤、土芋、即黄獨、俗名香芋」の「土芋」はホドイモ〔*Apios fortunei*〕で、漢名「塊芋、土卵、土豆」であるとし、マメ科の5小葉の複葉と花序、1個の肥大した塊根をもつ「土芋ホド」の図を『成形図説』から引用している〔1988〕。

これらの記述からは、中国や、その影響を受けた江戸時代の本草学におけるイモ類の分類、記載の混同、誤りがうかがわれる。しかし、牧野が「馬鈴薯」はジャガ（タラ）イモではなくホドイモ〔漢名：九子羊、土圀児、土栗子〕であるとする根拠に、福建の『松溪県志』と呉其溶著『植物名実図考』（1880）を挙げて、『救荒本草』（1406）と『植物名実図考』にある1本の根に複数個のイモが連なるホドイモの図を示していることが注目される〔1998〕。

ホドイモ〔*Apios*〕属の植物は、ヒマラヤから中国や日本に5種、北米に2種が分布するが、ホドイモは、わが国では林縁に自生するつる性の多年生植物である。栽培もされ、四国伊予の農書『消良記』〔1629-1654〕にも出ており、根⁷⁾のところが紡錘形～球形に肥大して形成される“塊、ほど”、すなわち、イモを食用にした〔牧野 1989、大橋 1981、立石 1995〕。『成形図説』が載せる「土芋ホド」の図は、種子根が大きく肥大して1個のイモになるクズイモ〔前田 1985、1991〕とよく似ていて（写真2）、混同して記載

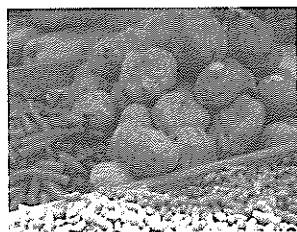


写真2 クズイモとラッカセイ（マレーシア、クアラ Lumpur）。

7) ホドイモは根が肥大するとされているが、アメリカホドイモでは地下茎の節間部が肥大する〔JULIARNI *et al.* 1997〕。

された可能性もある。しかし、中国やわが国のホドイモにはこのようなイモが1個形成される種類や、「連絲牽引、土中累累不斷」(『花鏡』)という「香芋」の記述を連想させ、また「根に数塊を連ねる」(『本草綱目啓蒙』)といわれたような種類があったとも考えられる。後者のようなイモの性状は、アメリカホドイモ (*Apios americana* Medik.) において 典型的であるが〔星川 1995〕(写真3)、「香芋」は“ホドイモ”であった可能性が考えられる。

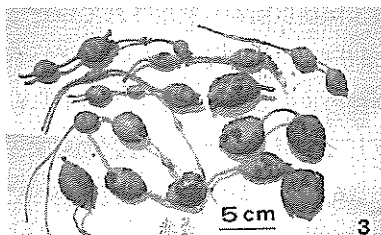


写真3 アメリカホドイモの種イモ (東北大学保存系統。後藤雄佐博士より分譲。2001年4月)。

4. 結 論

1) ラッカセイが伝播して栽培が普及する以前の14世紀ごろ、中国ではすでに「落花生」や「花生」と呼ばれていた作物があった。その茎や葉、花などの性状は、10世紀ごろには知られていた「扁豆」(フジマメ) に似たマメ科のつる性の植物で、そのイモが利用された。栽培には軽鬆な土壌が適し、つるを柵にからませた。旧暦の2、3月に植えられ、苦味がなくなる霜にあう初冬のころまで生育させた。イモの形と香りは「薯蕷」(ヤマノイモ) の類の「香芋」に似ており、煮て食べると美味であった。

2) マメ科の植物でイモを形成する種は約30種あるが〔ALLEN *et al.* 1981〕、つる性～ほふく性で、現生種の分布や導入によって東アジアでイモが利用された可能性がある種としては、ホドイモとクズイモが考えられる。東南アジア系のクズイモは、種子根が肥大して大きな1個のイモになるが、その形状は『成形図説』の「土芋ホド」の図のイモに似ている。しかし、クズイモは新大陸のメキシコ原産であり、東アジアや東南アジアでの栽培は新しいと考えられる。

「土圀児」とも呼ばれた「香芋」を「落花生」とする記述〔『花鏡』〕は少なく、その性状の記述から、「香芋」は、東アジアで利用の歴史がある“ホドイ

モ”であると推察される。

3) ラッカセイが中国へ伝播すると、茎のほふく性と地下結実性から、ラッカセイ伝播以前から栽培されていた「落花生」と混同され、誤ってラッカセイが「落花生」と呼ばれ、記述された。同時に、「長生果」というその異名とともに、別種のイモの名前である「香芋」もラッカセイに対して用いられた。「番（蕃）豆」、「土豆」、「地豆」などの異名がラッカセイに用いられるようになるのは、17世紀以後、栽培がひろく普及するようになってからである。今までに中国で、「長生果」の異名でも呼ばれた、この「落花生」とラッカセイとの混同について触れた文献はなく、今日では、種名の同定は困難である。

4) 日本でも、18世紀に中国からラッカセイが伝わる以前に、中国本草学文献にある「落花生」にはその音読みの訓名「ラククワセイ」が当てられていた〔貝原益軒『和蘭雅』1694、浅井 1964〕。そして、ラッカセイが伝わると「落花生」の名がそのまま用いられた。ラッカセイの栽培が広まり、よく知られるようになって、ナンキンマメやトウジンマメなどの和名でも呼ばれた。

謝 辞

文献閲覧の許可と協力を頂いた、高知県立牧野植物園牧野文庫と同司書、小松みち氏、および中国文献についてご教示を得た、三重大学名誉教授、塩谷格博士、および、原稿校閲の労を執られ、懇切なご教示を賜った方々に対して感謝の意を表する。

引 用 文 献

ALLEN, O.N. and E.K. ALLEN

1981 *The Leguminosae A Source Book of Characteristics, Uses and Nodulation*,
McMillan, Madison. USA.

浅井敬太郎

1964「蔬菜園芸」日本学士院編『明治前日本農業技術史』pp. 333-574、日本学術振興会。

天野元之助

1975『中国古農書考』龍溪書舎、東京。

陳文華・編

1991『中国古代農業科技史図譜』農業出版社、北京。

張光直著・量博滿訳

1976『考古学よりみた中国古代』1980、雄山閣出版、東京。

趙学敏

1765/1832『本草綱目拾遺』第七卷「果部」、第八卷「諸蔬部」。①牧野文庫蔵、清、同治10年1863。②人民衛生出版社、第2版、pp. 281-283、1983、北京。③木村康一他訳注、『新註増補国譯本草綱目』、1963、春陽堂書店、東京。

張璠（路玉）

1695『本経逢原』①牧野文庫蔵、清、金昌書堂。②陳文華1991。

檀 萃・輯

1799『濱海虞衡志』①清、嘉慶9年、1804、序刊、雲南図書館、牧野文庫蔵。

②宋文熙・李東平校注『濱海虞衡志校注』、雲南社会科学院研究叢書、pp. 253-254、1990、雲南人民出版社、昆明。

土居（清良）水也

1629～1654『清良記』（『親民鑑月集』）『日本農書全集』10、松浦郁郎・徳永光俊訳・解題、1980、農文協、東京。

嚴文明

1989「中国稲作農業の起源」陳文華・渡部武編『中国の稲作起源』、pp. 131-171、六興出版、東京。

吳万春

1990「《南方草木状》植物名録」『《南方草木状》国際學術討論會論文集』pp. 248-257。

人見必大

1697『本朝食鑑』島田勇雄訳注、『東洋文庫』296、1976、p. 276、平凡社、東京。

Ho, P.T.

1955 The Introduction of American Food Plants into China. *American Anthropologist*, 57: 191-201.

星川清親

1995「忘れられていたイモアピオス」週刊朝日百科『植物の世界』45-4: 270、朝日新聞社、東京。

JULIARNI, Y. GOTO, T. NAKAMURA, K. TAKAHASHI and K. HOSHIKAWA

1997 Tuberization in Apios (*Apios americana* Medikus) 1. Developmental morphology of tuber. *Jpn. J. Crop Sci.* 66: 466-471.

徐光啓

1639『農政全書』①牧野文庫蔵、明、崇禎12年、上海。②崔祝他訳『白話精訳農政全書』1955、瀋陽出版社、瀋陽。

貝原益軒（考古）・編

1694 ①『和爾雅』牧野文庫蔵、元禄7年、大井七郎兵衛刊。②浅井1964。

1705『大倭本草』卷之四穀類。①牧野文庫蔵、正徳5—宝永6年、京都、永田調兵衛刊。

- ②『故事類苑』植物部二十、草九、吉川弘文館、東京。
- 華南農業大学農業歴史遺産研究室・編
1990『《南方草木状》國際學術討論會論文集』pp. 1-297、農業出版社、北京。
- 北村四郎
1962・1985『《酉陽雜俎》の植物記事』（『中国中世科学技術史の研究』）、『本草綱目の植物』『北村四郎選集』II、pp. 57、63、85-121、287、保育社、東京。
- 木村陽二郎・監修
1988『図説草木辞苑』pp. 318-319、柏書房、東京。
- 屈大均（翁山）・撰
1700『広東新語』卷二十七、艸語。①牧野文庫蔵、清、康熙39年、1700。
②李育中・他注、広東人民出版社、p. 623、1990、広州。③孫ら1979。
- 嵇含
304『南方草木状』①『《南方草木状》國際學術討論會論文集』pp. 279-295.1990。
②牧野文庫蔵（写本）③『食物本草綱目』④孫ら1979。
- 賈銘・撰
年代不詳『飲食須知』陶文台注釈、中国烹飪古書籍叢刊、p. 42、1985、中国商業出版社、北京。
- 胡道靜
1963『我国古代農業發展概況和若干古農學資料概述』『學術月刊』、1963、第4期、渡部武訳『中国古代農業博物考』pp. 31-32、1990、農文協、東京。
- 甲元眞之
2001『中国新石器時代の生業と文化』pp. 66、67、87、92、93、100、中国書店、福岡。
- 李調元
清代初期『南越筆記』卷十五、①『叢書集成簡編』所収、pp. 194-195。②孫ら1979。
- 李長年
1990『千歳子与落花生』『《南方草木状》國際學術討論會論文集』pp. 202-208。
- 李惠林
1990『検討《南方草木状》成書問題』『《南方草木状》國際學術討論會論文集』pp. 134。
- 李杲（東垣）
年代未詳（元代）李時珍（東璧）校『食物本草』①牧野文庫蔵、〔扉・鍋救荒食物本草綱目〕、南城翁少麓刊。②天野信景『鹽尻』牧野文庫蔵。
- 李時珍
1578（1590、1596）『本草綱目』穀部目録、第二十四卷、穀之三菽豆類、『同』第二十七卷、菜部、①牧野文庫蔵、明、萬曆31年、序刊。②『新註增補國譯本草綱目』木村康一他訳註、1973、春陽堂書店、東京。
- 前田和美
1970『落花生品種の草型に関する生育解析的研究 第2報 無競争条件における個体の被度の発達と草型の関係』『日作紀』39: 184-191。
1985『マメ科のイモ形成種クズイモ（フィリピン系）の試作』『日作四国支部紀事』

22: 33-41。

1991『熱帯の主要マメ類—その栽培から利用まで—』(社)国際農林業協力協会、東京。

2000「江戸農書のリョクトウに関する記述—中国農書との比較とその農学的考察—」
『農耕の技術と文化』23: 73-102。

2001a「ラッカセイ伝播史における中国と日本—その1、伝播から栽培へ—」
『豆類時報』No.22: 15-23。

2001b「同一その2、地下結実性と栽培法の記述」『同』No.23: 20-27、

牧野富太郎

1989『改定増補新日本植物図鑑』pp. 336、344、北隆館、東京。

1998『植物一日一題』pp. 3-9、博品社、東京。

諸橋徹次

1985-88『大漢和辞典』巻三、p. 118、巻九、p. 544、p. 763、巻十一、p. 680、巻十二、
p. 445、大修館書店、東京。

中村璋八・佐藤達全

1987『食物本草』明德出版社、東京。

小野蘭山

1803『本草綱目啓蒙』(巻之二十三)『東洋文庫』536、pp. 208-209、1991、平凡社、東京。

大橋広好

1981「マメ科」『日本の野生植物』II. 草本、pp. 207-208、平凡社、東京。

王毓瑚・編

1964『中国農書書録』農業出版社、北京、天野元之助校訂、1975、龍溪書舎、東京。

山東省花生研究所・主編

1982『中国花生栽培学』pp. 1-2、上海科学技術出版社、上海。

戚経文

1990「《南方草木状》在植物学上的重大意義—兼對其中一些植物学的檢討」
『《南方草木状》国際學術討論會論文集』pp. 216-219。

篠田 統

1974『中国食物史』p. 237、p. 285、柴田書店、東京。

周之瑛・撰

明代『農圃六書』巻之一樹藝、牧野文庫蔵、小原八三郎自筆写本。

周文華

1620『汝南圃史』(『致富全書』)①島田他訳注『和漢三才図会』17。『東洋文庫』527、
p. 271、平凡社、東京。②山東省花生研究所、1982。③孫ら1979。

周定王(朱橚)

1406『救荒本草』①小野蘭山『本草綱目啓蒙』②北村1985。

薛己(立齋)

明代『本草約言』燕志学・校、巻之三『食物本草約言』牧野文庫蔵、萬治3年(1660)、
京都、田原二左衛門、和刻・訓点付き。

曾繁・白尾国柱・編

1804『成形図説』『五穀部』、卷之十九、p. 184、卷之二十二、pp. 359-424、1974、国書刊行会、東京。

孫中端・于善新・毛興文

1979「我国花生栽培歴史初探—兼論花生栽培種の地理的起源」『中国農業科学』第3期：89-94。

竹島敦夫

1991『和漢三才図会』17、書名注、『東洋文庫』527、p. 408、平凡社、東京。

立石庸一

1995「ホドイモ」『週刊朝日百科・植物の世界』45-4：270-271、朝日新聞社、東京。

寺島良安・編

1713『和漢三才圖会』①『倭漢三才圖会畧』卷第四百、菽豆類、牧野文庫藏、正徳3年、大阪杏林堂。②『和漢三才図会』17、18、島田勇雄他訳注、『東洋文庫』527、p. 271、532、pp. 155-175、1991、平凡社、東京。

唐啓宇・編著

1986『中国作物栽培史稿』pp. 357-359、農業出版社、北京。

楊競生

1990「対《南方草木状》一些植物名実鑒定の意見」『《南方草木状》国際學術討論會論文集』pp. 229-241。

(1) 牧野文庫蔵本および人民衛生出版社刊本（北京）『本草綱目拾遺』第七卷より引用。

1643 方以智、(清) 干藻・校『物理小識』（年代は篠田1974による）；1695『本経逢原』；年代不詳（清代初期）王風九『彙書』；（清代）陳扶搖『花鏡』；年代不詳『嶺南隨筆』；1747『福清県志』；850ごろ 段成式（柯古）『酉陽雜俎』

(2) 孫ら（1979）より引用。

304 嵇含『南方草木状』；南宋、范成大（石湖）『桂海虞衡志』；1178周去非『嶺外代答』；1504『上海県志』；1506『姑蘇県志』；1530黄省會『種芋法』；1538（1503）『常熟県志』；1587王世懋『学圃雜疏』；1621王象晋『羣芳譜』卷十穀四；1604馮應京『月令廣義』；1744『大埔県志』；年代不詳（明代）蘭茂『滇南本草』

(3) 山東省花生研究所（1982）より引用。

1503『常熟県志』

(4) 陳文華（1991）より引用。

1503・1538『常熟県志』；1711『衢州府志』

(5) Ho, P.T. (1955) より引用。

1503・1538『常熟県志』；年代不詳『種芋法』；1587『学圃雜俎』